



International Conference on Biomechanics in Sports 2015 参加報告書

広域科学専攻 博士課程1年 川村克枝 (中澤研究室)

私は、6月30日から7月3日に行われた第33回国際スポーツバイオメカニクス学会（ポアティエ大学、フランス）に参加した。今大会は、スポーツバイオメカニクスに関連する9つのキーノートスピーチ、8つのワークショップ、10種類のセッションで構成されており、世界中から、多くの研究者が参加した。

本学会はとりわけ各スポーツにおける競技力向上、及びけがの予防等に関するテーマを、バイオメカニクスの手法を用いて研究した成果が報告されていた。世界中のバイオメカニストが顔を合わせ、研究成果を伝え、情報交換する場となっている。我々は、6月30日のポスターセッションにおいて、中澤研究室で取り組んできた野球のピッチングとバッティングに関する2つのポスター発表を行った。ポスター発表は2分の口頭発表と20分の質疑応答で構成されていた。午前中の口頭発表では、パワーポイントで準備した2枚のスライドを用いながら研究の概要をステージにおいて説明し、午後からは、それぞれが各ポスターの前で質疑応答を行った。今回の発表内容は、プロで活躍するピッチャーを含む、各年齢グループにおける一流のピッチャーの投球の正確性に関する研究である。ポスターを見ながら、オランダ、オーストラリア、タイ、日本の研究者の方と発表内容に関して情報交換した。質疑応答において、オランダにおける野球の研究の現状を知る等の情報を得ることができた。

また、本学会プログラムの中には、各種のパーティーや近隣観光地のツアーが含まれており、世界中の研究者が親睦を深める機会も意識的に設けられている。なかでも、学生対象に開催されるメンタープログラムが印象的であった。事前に研究分野を伝え、関連する分野の研究者をメンターとして結びつけるプログラムである。今回私は西オーストラリア大学のジャクリーン教授をメンターとして迎え、イギリス、ベルギーの学生と共に論文作成に関する情報交換をした。それぞれの研究への思いを知ることができ、良い刺激を受けた。

学会開始に合わせるかのように、熱波が到来し、68年ぶりの記録的猛暑が続く日々であった。最高気温38℃、エアコン設備のないレクチャーホールで、スタッフが額に汗をにじませ、参加者に水を配りながら行われた本学会は、今後も心に残るであろう。この機会を与えられたことへの感謝を、研究成果でもって還元するため、日々の研究活動に励みたいと強く感じている。

